

三月定例能番組

令和二年三月一日(日) 午後一時始  
於 石川県立能楽堂

(能)

嵐

山

勝手 笠間 啓  
木守 中村 清  
姥 高野 秀幸  
シテ 広島 克栄

ワキ 北島 公之

ワキツレ 平木 豊男

ワキツレ 渡貫 多聞

間 清水 宗治

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 多田 順子

太鼓 大橋 紀美  
笛 瀬賀 尚義

後見 松田 若子  
福岡 聡子

休憩 二十分

(仕舞)

花

月

キリ

島村 明宏

地謡

高橋 憲正  
渡邊 荀之助  
渡邊 茂人  
藪 克徳

(狂言)

節

分

鬼 中尾 史生

女 炭 光太郎

後見 山田 讓二

(能)

東

北

シテ 松本 博

ワキ 苗加登久治

ワキツレ 平木 豊男

大鼓 田中  
小鼓 住駒

一義 幸英

笛 江野 泉

間 荒井 亮吉

後見 佐野 由於  
金森 良充

地謡

山本 貢伸 高橋 憲正  
谷 清士 藪 俊彦  
田屋 邦夫 高橋 右任  
木谷 哲也 佐野 玄宜

終了 午後四時半頃

## 能 嵐 山 (あらしやま)

後嵯峨院が吉野千本の桜を移植して以来、都の西嵐山は花の名所となりました。その花盛りに勅命を奉じて花見に急ぐ臣下たち(ワキ・ワキツレ)がいます。雲に見まがう満開の山桜、行き交う花見車の列、夕日に映えて走る雲、白波を染める滝の落花など、眺め渡して心を奪われたのは彼らだけではありません。いつの間にか現れた老人夫婦(前シテ・前ツレ)は、花の下を清め深く信仰する様子です。嵐山の花には吉野の木守・勝手の神が影向し、嵐に神風を吹き返して花を守り、迷いの雲を晴らすのだといひます。夫婦が自らをその神々であると明かして南方へ去ったあと(中入)、夜桜の嵐山に神遊びの楽が響き、木守・勝手の神々(後ツレ)に続いて、吉野金峰山の蔵王権現(後シテ)が南風に乗って飛来します。神遊びを奏する木守・勝手も、悪魔降伏の眼光鋭い蔵王権現も同体異名の姿です。国土を照らし衆生を守る誓いのままに、花の嵐山に輝く金峰山を現出させます。

## 狂 言 節 分 (せつぶん)

節分の夜には鰯の頭を刺した柊の枝を門口に置き、鬼を打つ豆を撒きます。その豆を拾って噛もうと、遙々蓬萊の島から来た鬼が、女の家を覗き見て、したたかに柊で目を突きます。出てきた女に食べ物を乞ううち、その美しさに心奪われ、蓬萊の島で流行る小歌を種々に聞かせては、女の気を引こうとしますが、相手にされず泣き出してしまいます。あげくは隠れ蓑・隠れ笠、打ち出の小槌まで騙し取られて、豆を撒かれて追ひ払われます。

## 能 東 北 (とうぼく)

花の都は梅の花の盛りです。東国方から出た僧一行(ワキ・ワキツレ)が王城東北のとある古寺で和泉式部と称する梅を眺めていますと、一人の女(前シテ)が声を掛けて現れます。寺は上東門院の旧跡であり、梅の木は和泉式部が植之軒端の梅と名付けたことを教えて、女は僧に読経を勧めます。式部の名残は色香を増す花や方丈の臥所をはじめ院内の優雅なたたずまいに伝わります。いにしえを偲ぶ女は自分こそこの花に住む梅の主と言ひ、木隠れます(中入)。所の者(アイ)から東北院の子細や軒端の梅の由来を聞いた僧は、花の下で終夜法華経を誦誦して吊います。そこへ式部(後シテ)が現れ、かつて関白道長の譬喩品読経に誘われて火宅を出たと詠んだ歌を思い出し、和歌の功德によって火宅を逃れ歌舞の菩薩となったことに感謝します。しばらく霊地の四季に仏縁を観想し、梅香る春の夜を舞う式部は、懐旧の涙を恥じ方丈の室を蓮台として僧の夢から遠ざかります。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 令和二年五月三日(日)午後一時始

(能) 小袖曾我 (狂言) 隠 狸 (能) 須磨源氏